

一錢銅貨

小川未明

青空文庫

英ちゃんえいは、お姉さんねえから、お古ふるの財布さいふをもらいました。そして、お母さんかあから、小遣いこづかをいただくと、その中なかにいられておきましたが、じきに、つかってしまおうので、その財布さいふの中なかは、いつもからっぽでありました。

ある日ひ、英ちゃんえいが、その財布さいふを、ばたばたやっていると、お姉さんねえがごらんになって、
「英ちゃんえいの、財布さいふの中なかは、いつもからっぽなのね。」と、笑いながらおっしゃいました。

「からっぽなもんか、そら、ごらんよ。はいつているだろう。」
と、英ちゃんえいは、お金かねをつまんで見せみました。

「たった、一銭せんきりしかないの？」

「姉ねえさんは、この銅貨どうかが、いつできたと思おもつてるの。そりや、古ふるいんだから。」

「そうね、大おおきいから、大たい正しょうか、明めい治じにちがいないわ。」

「明めい治じ九年ねんなんだぜ。まだ、うちのお父とうさんもお母かあさんも、生うまれない前まえのだよ。その時じ分ぶんから、日にっ本ぽんじゆうをぐるぐるまわつていたんだ。そう思おもつて、僕ぼく、大だい事じにしているのさ。」と、英えいちやんは、いまのから見みると、大おお形がたな、そして、手てずれのした、一せん銭どう銅どう貨かを裏うら表おもてを返かえしながら、さもなつかしそうにながめていました。

「まあ、そんなに、古ふるいの。」と、お姉ねえさんも、手てにとつて、な

がめました。

「いろいろの人の手に渡つてきたんだね。」

「それは、そうよ。英ちゃんは、どんな人の手に、このおあしが渡つてきたと思うの。」

「大人や、子供や、金持ちや、貧乏人……。」

「もつと、いつてごらんなさい。」

「船にも乗つたらうし、汽車にも乗つたらうし、新聞売りの手にも渡つたらうし、バッチンの穴の中へも入つたらうし、紙芝居のおじさんの手にも、そのほか考えたら、まだいろいろあるだろう。」

「だけど、海や、河の中に沈んだり、火の中へはいつて、焼けて

しまつたら、もうこうして、このお金はなかつたんですよ。」と、お姉さんは、おつしやいました。それに、ちがいないと、英ちゃんは、思つたが、

「畳の間や、火鉢の灰の中に、落ちたことはあつたかもしれな
よ。」といいました。

「英ちゃんは、このお金をつかわないつもり。」と、姉さんは、おききになりました。

「僕、大事にして、しまつておくのだ。」

英ちゃんは、財布をばたばたやりながら、あちらへいつてしま
いました。

その晩、英ちゃんは、財布をまくらもとに置いて、寝たら、夢

を見ました。

「坊ちゃん、私たちも、人間と同じように、一代のうちに、悲しいこともあれば、うれしいこともあります。大事に取り扱われればうれしいし、粗末にとりあつかわれればいい気持ちはいたしません。ひとつ身にしみて、忘れられないお話をいたしましょうか。」と、一銭銅貨が、いいました。

「ああ、きかして、おくれ。」と、英ちゃんは、答えました。

まだ、早い春の寒い夜のことでありました。その晩も、だんだんふけて、もう街は戸をしめて、電車に乗っている人も少なくなつたのです。

ゴウ、ガタン、ゴウ、ガタンといって、電車は走っていました

た。ある停留所^{ていりゆうじょ}で、ちよつととまるとみすばらしい、腰^{こし}の曲^まがったおじいさんが、つえをついて、電車^{でんしゃ}にのりました。

「このおじいさんは、こんなふうをして、いま時分^{じぶん}どこへいくの
だろう。」と、乗^のつていた人^{ひと}たちは心^{こころ}のうちで思^{おも}つたのです。

が、おじいさんが、腰^{こし}をかけるのを見^みてから、車^{しゃ}掌^{しょう}さんは、
チン、チンとベルを鳴^ならしました。そして、おじいさんの前^{まえ}へき
て、

「おじいさん、どこまでですか。」と、切符^{きっぷ}を切^きろうとしました。
おじいさんは、がまぐちを振^ふつて、ありたけの銭^{ぜに}を車^{しゃ}掌^{しょう}に
やりました。車^{しゃ}掌^{しょう}は、よくかんじようしてみました。

「おじいさん、一銭^{せん}足りませんよ。」といいました。

「わたしは、あると思つたが、まけてはくださるまいのう。」と、おじいさんはいいました。

「規則きそくですから、おまけすることはできません。」と、車掌しゃしょうは、答こたえて、おじいさんのようすを見守みまもつていました。

あわれなおじいさんは、このとき、つえをついて立たち上あがりました。そして、電でん車しゃから降おりるため出でていこうとしました。

「おじいさん、一銭せん足たらないのは私わたしがあげます。」といつて、車掌しゃしょうさんは、自分じぶんのがまぐちから一銭銅貨せんどうかを出だして、おじいさんさんにやりました。

おじいさんは、心こころからありがたく思おもつて、そのお金かねをいただき
ました。

「坊ちゃん、そのときの、一銭銅貨が、私なんですよ。」と、銅貨が、いいました。

「それから、おじいさんは、どうしたい。」と、英ちゃんが、たずねたときに、目がさめたのであります。

学校から帰ると、英ちゃんは、お母さんから、八銭おあしをいただいで、たこを買いにいきました。十銭出すと、とても、いのが買えるのです。

「おじさん、これをば八銭に、おまけしてくれない。」と、英ちゃんは、いつてみました。

「坊ちゃんだから、九銭にまけておきますよ。ほかの子でしたら、おまけしません。」と、答えました。英ちゃんは、どうしようか

と考かんがえましたが、とうとう、財布さいふを空からっぽにして、大事だいじな一錢銅せんどう貨うかをやつてしまいました。そのとき、

「かわいそうだな。」と、英えいちゃんがいうと、

「私わたしは、しまつておかれるよりか、旅たびをするほうが好きすです。」

と、銅貨どうかは、ちかりと笑わらつて、ほかのお友ともだちといっしょに、箱はこの中なかへはいつていきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院

1941（昭和16）年4月

初出：「週刊朝日 23巻17号」

1933（昭和8）年4月20日

※表題は底本では、「一一銭《せん》銅貨《どうか》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一銭銅貨

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>